

「いのち」と「かたち」をめぐる一考察

とくに「たましひ」を媒介として

丸山敏秋（倫理研究所理事長）

死ぬる命生きもやすると心みに玉の緒ばかり逢はんといはなん（藤原興風『古今集』）

観音の大悲の桜咲きにけり（正岡子規『寒山落木抄』）

あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命なりけり（斎藤茂吉『あらたま』）

はてしなき宇宙に浮かむ水滴みそらのあるかなきがにかそけき命（丸山敏雄『天地』）

はじめに

ここ十数年、筆者は「いのち」という次元に迫ることを念頭に置きながら、執筆に取り組み、講演も行ってきつた。「いのち」とは、人間を含む万物という個別存在の根底をなし、現象世界とは次元を異にする「一」なるものの呼び名である。

個々の存在物をかく在らしめる幽隠かくれた統一力を「いのち」と呼ぶとき、世界は「いのち」が「かたち」をとって顕現あらわれた多様性に満ち充ちている。科学とか学問は、その多様な「かたち」の世界のあり方を探究し、のみならず「いのち」にまで肉迫しようとしてきた。他方、芸術とは「いのち」を「かたち」にする営みといえよう。「いのち」を直観（あるいは直覚）し、そこからどのような「かたち」が表現できるかを、芸術家は追い求めてきた。あるいは宗教は、「いのち」に直接的に参入する営みであろう。そのように見るとき、学問も芸術も宗教も、あるいは人それぞれの日々の生活にしても、畢竟「いのち」の自証である、といえるのではないか。

筆者がそれなりに「いのち」を追究してきた過程で、折々に啓示的なヒントを与えてくれた一冊がある。文芸評論家の山本健吉（一九一七～八八）による『いのちとかたち 日本美の源を探る』（新潮社、一九八一、第三十四回野間文芸賞）がそれだ。長崎市に生まれた山本は、慶應義塾大学国文科卒業後、折口信夫に師事した。日本の古典作品や現代文学に対する熟成した数多くの業績に対して、一九八三年に文化勲章が贈られている。晩年の山本による名著の誉れ高いこの著作で、一貫して探求されたのは「たましひ」（本稿では山本に倣ってそう表記する）、とくに「やまとだましひ」の本源である。「いのち」と「かたち」を対峙させたフレームの中で行われた「たましひ」の探求は、「日本とは何か」を追究した思索の軌跡でもあった。⁽¹⁾

本稿は、もはや絶版となっている『いのちとかたち』の内容を摘出して考察しながら、日本的な「たましひ」のありようを探ろうとするものである。その背景には、「いのち」や「たましひ」に対する感受性がいちじるしく鈍ってしまったように思える現代人に対しての危惧が潜むことも申し添えておきたい。

なお、文中に引用する太字部分は『いのちとかたち』の本文（漢字は現代表記に統一）

であり、括弧内の数字はその頁数を指す。